

書 評

南 亮三郎編『現代人口論』

千倉書房, 1975, 228+7 ページ

「よい人口論の書物を広範な国民大衆のあいだに浸透さすこと(序論)」が、世界的な観心事であるとともに日本においても避くことのできない人口問題を解決して行くことである。そのような書物が、多くの科学領域からの接近とその成果をふまえたうえで書かれたものでなければならないのは、人口論の本質から言って当然の事であるが、本書は、そのような要請に答えることを目的として編まれたものである。

著術陣をみると、中央大学の南研究室で学んだ人口研究の専門家——人口研究のなかでの専門分野はそれぞれ異っている——で、現在でも定期的な会合で研究を続けている人々であり、従って、比較的に多面にわたる視点による人口論が展開されていて、さきにあげた要請にある程度答えていると言って良い。

また、内容についてみても人口論に対する多面的なアプローチが為されていることがあきらかで、人口学総論、人口の歴史と人口思想、人口転換と近代化という、人口学ならびに人口論の本質に関する3章について、いわば人口と社会とのかかわりあいに関する、人口・資源・労働力、人口成長と経済発展、人口移動と社会変動、人口都市化と生活環境という4章があり、さいごに、人口現象の分析方法に関する人口統計の方法と題する章と、全体のしめくくりの役目をもつ、現代の人口政策の9章で構成されている。

以上の構成は、瞬時といえども静止しない社会的な存在であると規定される人口に対して、その本質にせまろうとする個別科学による研究諸成果が集成されることによって成立する、あるいは人口に関する諸理論の体系的整序を確立しようとする、「人口科学 Population Science」——人口科学という独立の科学はまだ成熟しているとは言えないが——のなかで当面重要な問題と考えられるもの、即ち、人口転換、人口と経済発展との関係、人口の都市化と移動、人口統計学上の成果、人口政策を中心としているという事になる。

扱われている多くの問題をそれぞれについて触れて行くことは紙数の関係で不可能であるので、本書の編集の基本方針に関してのみいえば、本書の最大の特色であるとも言える事ではあるが、マルサスの人口論研究者として著名な南博士の影響が全編を通して強く流れている点を指摘しないわけにはいかない。たとえば、人口思想(第2章)に関して、マルサスの人口論に対するマルクスの批判がふれられていても、マルクスの人口論以外の、マルクス主義陣営からする人口論は一切はふかされている。このことは、人口問題あるいは人口現象の階級的視点の欠如という事につながり、たとえば、人口転換、とくに出生力低下に関する差別出生力に関してはふれられていないし、労働力については潜在失業者に対する考察が抜ける、という事になる。さらに言えば、食料問題の基本的解決のためには「耕作地の拡充と既耕地の農業生産性上昇とが同時に追求され」そのために「資本の調達などに十全な国際協力」(P81)が必要なのであると指摘するにとどまり、発展途上国の農業の低生産性をもたらしている基本的な地主小作関係その他の、農村の社会構造そのものの指摘が全く為されないし、農産物の流通機構の問題が抜けているなど、昨年の世界人口会議における、発展途上国陣営の論理を理解するための素材が一部欠如しているのである。

現在、発展途上国の大部分は、何んらかのかたちで人口問題に悩んでいるが、本書は、いわば、先進国の理論で編まれたものであり、その意味で、発展途上国の人口問題を理解するには、本書の内容に付け加えられるべき事が沢山あると思われる。しかしながら、本書が出版された意義は大きく、これを契機として、個別科学からの人口研究者による、総合的な(単なる寄せ集めではない)類書が世に現われる事を期待したい。

(河邊 宏)